

「認知症の高齢者のケア」授業前後における 看護学生の認知症の高齢者イメージの変化

木下 香織*

新見公立大学看護学部

(2016年11月30日受理)

A大学看護学部2年次に開講している老年看護学援助論の講義「認知症の高齢者のケア」の授業前後の看護学生の認知症の高齢者イメージの変化を明らかにすることを目的に質問紙調査をおこなった。授業の初めに記載を求めた、刺激語として思いつくことでは、「認知症の高齢者」では最多7個、最少0個、平均1.9個で、記憶障害や妄想などの認知症の症状に関する内容、対応の困難さや介護負担の大きさなどが大半を占めた。「認知症の高齢者のケア」では最多3個、最少0個、平均1.2個で、認知症の高齢者のケアの困難さをイメージする記述が半数以上を占めた。認知症の高齢者に対するイメージは肯定的に変化しており、授業前後の点数の差の平均値は全項目で統計的な有意差が認められた。主観的評価においても肯定的な変化を感じた看護学生が多く、認知症の高齢者のイメージが肯定的に変化したことは、本授業の教育効果が認められたと考える。

(キーワード) 看護学生, 認知症高齢者イメージ, 変化, 授業

はじめに

わが国は高齢化が進むなか、後期高齢者数の増加、認知症高齢者数の増加が指摘されている。厚生労働省は2005年度から「認知症を知り地域をつくる10ヵ年」に取り組み、「認知症サポーター養成キャラバン」によって、認知症について理解し、認知症の人やその家族を温かく見守り、支援する地域づくりなどの支援策が講じられてきた。続いて、2012年9月には「認知症施策推進5ヵ年計画（オレンジプラン）」が策定されていたが、2012年の厚生労働省の調査によると、2025年の認知症高齢者数推計値は470万人とされていたが、2015年には当初の見込みの1.5倍、730万人にのぼると修正され、「高齢者の5人に1人が認知症」と推計された。そして、2015年1月「認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～（新オレンジプラン）」が策定された。認知症高齢者と家族にやさしい地域づくりを進め、認知症の予防や治療に関する研究開発が期待されると同時に、認知症高齢者への看護の質の向上は重要な課題の一つである。

看護基礎教育においても、認知症高齢者への看護の質向上に寄与できるような教育実践が老年看護学領域における課題である。2015年に開催された日本老年看護学会第20回学術集会では、自主企画として「出張！高齢者ケアの教師塾湘南 看護基礎教育/継続教育で認知症を教える・学ぶ」が開催されるなど、老年看護学を担当する看護教育者

にとっても関心が高い。看護基礎教育での研究としては、看護学生を対象に認知症の高齢者イメージの変化についての報告が散見されるが、その多くは臨地実習に関連した報告である^{1)~4)}。道繁らは、講義前に課した「認知症高齢者のイメージ」および「認知症高齢者にかかわる上で看護者として必要なこと」のレポートを質的に分析した。その結果、看護学生が講義前に抱いている認知症の高齢者のイメージは、疾患（患者本人）に関する中核症状や周辺症状についての記載が多かったと報告している⁵⁾。また、認知症の高齢者に対するイメージの縦断的調査として、短期大学課程の看護学生を対象として入学時、各論実習前および卒業前に調査した結果、入学時のやや否定的なイメージが卒業前には肯定的なイメージへと大きく変化したとの報告がある⁶⁾。しかし、認知症の高齢者の看護についての授業前後でのイメージ変化の報告は見当たらなかった。看護学生の認知症の高齢者のケアへの関心を高め、知識理解を推進することは認知症の高齢者への支援意欲を高めるとの報告もある⁷⁾。講義前後での学生の認知症の高齢者へのイメージ変化を把握することは、授業評価でもあり、その後の臨地実習指導の参考資料としても重要である。

本研究では、A大学看護学部で2年次に開講している老年看護学援助論で実施している講義「認知症の高齢者のケア」の授業前後の看護学生の認知症の高齢者へのイメージの変化を明らかにすることを目的とした。

*連絡先：木下香織 新見公立大学看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

1 研究方法

1. 対象

調査対象は、A大学看護学部で2年次に開講している老年看護学援助論の2015年度履修者64名とした。そのうち、研究への協力で同意が得られた41名を分析対象とした。

2. 調査時期

2015年6月23日, 6月30日

3. 調査方法

老年看護学援助論の単元：認知症の高齢者のケアの授業開始時および終了時に、独自に作成した調査用紙を用いて実施した。

4. 調査内容

1) 授業開始時：「認知症の高齢者」「認知症の高齢者の看護」を刺激語とした自由記載、認知症に関連する語句の認知、認知症の高齢者に対するイメージを調査した。認知症に関連する語句の認知は、(新)オレンジプラン、認知症サポーター、オレンジリング、ユマニチュードについて、「知っている」「聞いたことはある」「まったく知らない」の3件法で回答を求めた。認知症の高齢者に対するイメージは、中野ら⁸⁾のSD法における老人イメージスケールを適用した。これは17形容詞対からなり、5件法(1~5点)で回答を求めた。イメージ調査は、点数が高いほど肯定的な認識を示す。

2) 授業終了時：授業開始時と同様の認知症の高齢者に対するイメージ、主観的な変化、学生の属性について調査した。主観的な変化は、認知症の高齢者へのイメージと認知症の高齢者へのケアのイメージについて「肯定的に変化した」「変化なし」「否定的に変化した」、認知症の高齢者とそのケアへの関心度について、「関心が高まった」「変化なし」「関心がそがれた」の3件法で回答を求めた。

学生の属性は、祖父母との同居経験の有無、認知症の高齢者と関わった経験の有無、親族に認知症の高齢者の有無、性別を尋ねた。

調査用紙は、授業開始時の調査のあと学生が各自で保管し、授業終了時の調査のあとで提出を求めた。

5. 分析方法

自由記載のデータは内容の類似性にそって整理して、カテゴリー化した。認知症の高齢者に対するイメージ、主観的な変化は単純集計および授業前後で対応サンプルの差の平均値の検定をおこなった。分析には、SPSS19.0J for Windowsを用いた。

6. 倫理的配慮

当該授業の開始時に、調査は授業評価の一環であると同時に研究の目的、研究への協力は自由意思によること、調査は無記名でおこない個人が特定されないようデータ化して分析を進めること、記述内容および研究協力の可否は成績評価に一切関係しないこと、調査結果を纏めて看護系学会で発表する予定であることを口頭と書面で説明した。当該授業の終了時に、再度、調査の目的、自由意思による参加、成績には関係しないことを口頭で説明し、研究への同意が得られるか二者択一で尋ね、「同意する」と回答した者のみを分析対象とした。また、本研究は新見公立大学研究倫理委員会の承認を得た(承認番号:102)。

II A大学看護学部 老年看護学概論「認知症の高齢者のケア」の概要

A大学では、「老年看護学援助論」は2年次前期に開講している。関連科目として、「老年看護学概論」は1年次後期、認知症などの器質性精神障害などを含む「心の健康と疾患」は2年次後期の開講である。

当該授業は、認知症の理解を基礎に、認知症の高齢者とその家族への支援について知識を深め専門的に援助できる知識と態度を養うことを目的としている。授業内容は、認知症の定義、社会的背景、認知症をきたす原因疾患、診断と治療、認知症の症状と高齢者の心の理解、認知症の高齢者への対応とケア、高齢者の生活の場、家族への支援とサポートシステムなど、2コマでおこなった。

III 結果

1. 学生の属性

祖父母との同居経験は、「あり」24名(58.5%)、「なし」17名、認知症の高齢者との関わりは「あり」19名(46.3%)、「なし」22名、親族に認知症の高齢者の有無では「あり」6名(14.6%)、「なし」35名であった。性別は、「女性」38名(92.7%)、「男性」3名であった。

2. 認知症に関連する語句の認知

認知症に関連する4つの語句の認知度を表1に示した。いずれの語句も「知っている」と回答した者の割合は少なかつた。「聞いたことがある」の割合が、『(新)オレンジ

表1. 認知症に関連する語句の認知 n=41 (人)

	知っている	聞いたことはある	まったく知らない
(新)オレンジプラン	1	10	30
認知症サポーター	1	12	28
オレンジリング	2	3	36
ユマニチュード	1	2	38

ジブラン』と『認知症サポーター』では3割弱、『オレンジリング』と『ユマニチュード』は1割以下であった。

3. 刺激語で思いつくこと

1) 「認知症の高齢者」について

「認知症の高齢者」を刺激語として、学生が記述した語句は最多7個、最少0個、平均1.9個であった。刺激語によるイメージや頭に浮かんだ語句の記述は89コードであった。内容の類似性に沿って整理した結果、23のサブカテゴリー、11のカテゴリーに分類できた(表2)。以下、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを《》、コードを〈〉で示す。

【短期・長期の記憶障害がある】は、17コードから《物忘れがある》《短期記憶ができない》《家族のことも忘れる》の3個のサブカテゴリーを形成した。《物忘れがある》は〈物忘れがある〉〈忘れっぽい〉など12コードで、サブカテゴリーのなかで最もコード数が多かった。《短期記憶ができない》は〈昔のことは覚えているが近いことは覚えていない〉など3コード、《家族のことも忘れる》は〈家族のことを忘れてる〉など2コードで、認知症の記憶障害の具体的な内容であった。

【何度も同じことを尋ねたり話したりする】は19コードで、3個のサブカテゴリーを形成した。《何度も同じことを聞く》6コード、《何度も同じことを話す》11コード、《家族のことも忘れる》2コードで、いずれも認知症の高齢者の

繰り返しの言動に関する記述であった。

【物盗られなどの妄想がある】は5コードで、2個のサブカテゴリーを形成した。《妄想がある》は〈妄想〉〈人を疑う〉など3コード、《物盗られ妄想がある》は〈盗られたと思ひ込んでしまう〉など2コードであった。

【徘徊をする】は《徘徊をする》の1カテゴリーで、〈徘徊をする〉〈外に出ていく〉など9コードであった。

【情緒が不安定で機嫌が悪い】は6コードで、2個のサブカテゴリーを形成した。《気分が変わりやすい》は〈喜怒哀楽が激しい〉〈ちょっとしたことで怒ったり叫んだり、暴力をふるう〉など4コード、《機嫌が悪い》は〈イライラ〉など2コードであった。

【コミュニケーションが困難で対応が難しい】は10コードから3個のサブカテゴリーを形成した。《コミュニケーションをとるのが難しい》は〈コミュニケーションが難しい〉〈意思疎通が難しそう〉など5コード、《対応の仕方がわからない》は〈どう接するべきかわからない〉など3コード、《行動の理解が難しい》は〈行動が急で矛盾している〉など2コードであった。

【自立生活が送れず、介護負担が大きい】は15コードで4個のサブカテゴリーを形成した。《介護が大変》は〈介護が大変〉〈負担が大きい〉など5コード、《自分のことができなくなる》は〈排泄ケアを自分でできない〉など4コード、《1人で生活できない》は〈誰かが一緒にいなければならない〉

表2. 「認知症の高齢者」のイメージ、頭に浮かんだ語句

n=89

カテゴリー	サブカテゴリー	コード数	コードの例
短期・長期の記憶障害がある	物忘れがある	12	物忘れがひどい、忘れっぽい、忘れる
	短期記憶ができない	3	昔のことは覚えているが近いことは覚えてない、短期記憶ができない
	家族のことも忘れる	2	家族のことを忘れてる
何度も同じことを尋ねたり話したりする	何度も同じことを聞く	6	同じことを何回も聞く、何回も同じことを繰り返し聞いている
	何度も同じことを話す	11	同じことを何回も繰り返し話す、何度も同じことを言っている
	何度も同じ言動を繰り返す	2	同じ言動を繰り返す
物盗られなどの妄想がある	妄想がある	3	妄想、人を疑う
	物盗られ妄想がある	2	盗られたと思ひ込んでしまう、「盗まれた」と認知症の人が言っていた
徘徊をする	徘徊をする	9	徘徊をする、外に出て行く
情緒が不安定で機嫌が悪い	気分が変わりやすい	4	喜怒哀楽が激しい、ちょっとしたことで怒ったり叫んだり、暴力をふるう
	機嫌が悪い	2	怒る、イライラ
コミュニケーションが困難で対応が難しい	コミュニケーションをとるのが難しい	5	コミュニケーションが難しい、意思疎通が難しそう
	対応の仕方がわからない	3	どう接するべきかわからない、いろいろなことがわからなくなる
	行動の理解が難しい	2	行動が急で矛盾している
自立生活が送れず、介護負担が大きい	介護が大変	5	介護が大変、負担が大きい
	自分のことができなくなる	4	自分のことができなくなる、排泄ケアを自分でできない
	1人で生活できない	3	誰かが一緒にいなければならない、目を離しておけない
	介護者の精神的負担が大きい	3	家族への精神的負担が大きい、疲労感
事故に遭いやすい	事故に遭いやすい	2	高速道路を逆走している、事故に遭いやすい
認知症の人に対する恐怖心がある	「こわい」と思う	3	こわい、少しこわい
	なにをするかわからないこわさ	1	なにをするかわからないので少しこわい
身近な人には認知症になってもらいたくない	身内になってほしくない	1	身内になってほしくない病気
優しそう	優しそうな人多そう	1	優しそうな人多そう

い)〈目を離しておけない〉など3コード,《介護者の精神的負担が大きい》は〈家族の精神的負担が大きい〉など3コードであった。

【事故に遭いやすい】は《事故に遭いやすい》の1カテゴリーで,〈高速道路を逆走している〉など2コードであった。

【認知症の人に対する恐怖心がある】は4コードで,2個のサブカテゴリーを形成した。《「こわい」と思う》3コード,《なにをするかわからないこわさ》1コードで,認知症の高齢者とその行動への恐怖心に関する記述であった。

【身近な人には認知症になってもらいたくない】は《身内になってほしくない》の1カテゴリーで,〈身内になってほしくない病気〉の1コードであった。

【優しそう】は《優しそうな人が多そう》の1カテゴリー,〈優しそうな人が多そう〉の1コードであった。

2) 「認知症の高齢者の看護」について

「認知症の高齢者の看護」を刺激語として,学生が記述した語句は最多3個,最少0個,平均1.2個であった。刺激語によるイメージや頭に浮かんだ語句の記述は59コードあった。内容の類似性に沿って整理した結果,21のサブカテゴリー,10のカテゴリーに分類できた(表3)。以下,カテゴリーを【】,サブカテゴリーを《》,コードを〈〉で示す。

【疲労感が強く大変である】は,23コードから《大変そうである》《大変である》《疲労感が大きい》《身体機能

の低下がないので大変》の4個のサブカテゴリーを形成した。《大変そうである》は12コードで,〈身体的にも精神的にもきつそう〉〈ケアするのが大変そう〉などで,サブカテゴリーのなかで最もコード数が多かった。《大変である》は〈認知症のない高齢者より大変〉〈言葉や行動を選び慎重に援助する〉など7コードで,《大変そう》に比べて具体的な内容の記述であった。《疲労感が大きい》は〈すぐ疲れる〉など3コード,《身体機能の低下がないので大変》は〈体は元気であるため大変〉の1コードであった。

【理解を得るのが難しい】は5コードで,2個のサブカテゴリーを形成した。《理解を得るのが難しい》は〈物事を理解してもらるのが難しい〉など3コード,《難しそう》は〈少し難しい〉〈面倒そう〉の2コードであった。

【ケア提供者の精神的負担が大きい】は5コードで,4コードの《看護師の精神的負担が大きい》と1コードの《家族の精神的負担》2つのサブカテゴリーで形成された。

【ゴールが見えず難しい】は4コードで,3コードの《治らないので難しい》と1コードの《ゴールが見えない》で形成された。

【繰り返しの言動などに丁寧に対応する】は9コードで,3個のサブカテゴリーを形成した。《同じ話を何度も聞く》は〈同じ話を何度も聞く〉〈話に耳を傾ける〉など4コード,《丁寧な関わりが必要》は〈二度手間三度手間である〉〈説明を何度かする必要ある〉など4コード,《徘徊する高齢

表3. 「認知症の高齢者の看護」のイメージ,頭に浮かんだ語句

n=59

カテゴリー	サブカテゴリー	コード数	コードの例
疲労感が強く 大変である	大変そうである	12	身体的にも精神的にもきつそう,ケアするのが大変そう
	大変である	7	認知症のない高齢者より大変,言葉や行動を選び慎重に援助する
	疲労感が大きい	3	すぐ疲れる
	身体機能の低下がないので大変	1	体は元気であるため大変
理解を得るのが 難しい	理解を得るのが難しい	3	物事を理解してもらるのが難しい,言うことを聞かそう
	難しそう	2	少し難しい,面倒そう
ケア提供者の 精神的負担が大きい	看護師の精神的負担が大きい	4	精神的に強くないとできない,精神的につらい
	家族の精神的負担	1	家族がストレスを抱える
ゴールが見えず難しい	治らないので難しい	3	回復が見込めない,治らないので難しい
	ゴールが見えない	1	ゴールがなかなか見えない
繰り返しの 言動などに 丁寧に対応する	同じ話を何度も聞く	4	同じ話を何度も聞く,話に耳を傾ける
	丁寧な関わりが必要	4	二度手間三度手間である,説明を何度かする必要ある
	徘徊する高齢者に付き添う	1	認知症で徘徊する妻を夫が追いかける
認知症を理解し, 受容的な看護を 提供する	看護者の努力が重要	3	試行錯誤が多い,こちらが努力すれば問題ない,我慢
	その人に寄り添う看護が必要	2	大変だけど,その人に寄り添って看護することが大切
	優しく接する	2	優しく接する,なにを言われても笑顔で対応する
	認知症の症状を理解して受容的な看護	1	症状をきちんと理解し,患者を受け入れて援助している
日常生活行動を支援する	日常生活の援助	2	日常生活の援助をする感じ,身の回りのお世話などをする
チームで看護する	チームで看護する	1	一人ではなく何人かで助け合って看護する
恐怖心がある	被害者になりそうでこわい	1	被害者になってしまうかとこわい
看護をイメージできない	わからない	1	わからない

者に寄り添う)は「認知症で徘徊する妻を夫が追いかける」1コードであった。

【認知症を理解し、受容的な看護を提供する】は8コードで、4個のサブカテゴリーを形成した。《看護者の努力が重要》は「試行錯誤が多い」「こちらが努力すれば問題ない」など3コード、《その人に寄り添う看護が必要》は「大変だけど、その人に寄り添って看護することが大切」など2コード、《優しく接する》は「なにを言われても笑顔で接する」など2コード、《認知症の症状を理解して受容的な看護を提供する》は「症状をきちんと理解し、患者を受け入れて援助している」1コードであった。

【日常生活行動を支援する】は2コードで、《日常生活の援助》1カテゴリー、「日常生活の援助をする感じ」など2コードであった。

【チームで看護する】は《チームで看護する》の1サブカテゴリー、「一人ではなく何人かで助け合って看護する」の1コード、【恐怖心がある】は《被害者になりそうで怖い》の1サブカテゴリー、「被害者になってしまわないか怖い」の1コード、【看護をイメージできない】は《わからない》の1サブカテゴリー、「わからない」の1コードであった。

4. 看護学生の「認知症の高齢者」に対するイメージ

1) SD法によるイメージの変化

SD法を用いた認知症の高齢者のイメージを図1に示した。

全17項目の平均は授業前2.68、授業後3.35であった。授業前の調査では、「話しやすい」2.38が最も点数が低く、「すばらしい」2.45、「きちんとした」「速い」「嬉しい」2.50、「鋭い」2.53、「美しい」2.60、「賢い」「良い」「強い」2.63などの項目ではとくに否定的イメージが強かった。「忙しそう」3.03が最も点数が高かった。授業後の調査では、点数が最も高かったのは「温かい」3.83、最も低かったのは「速い」2.76であった。授業前後の点数の差では、最も大きかったのは「話しやすい」1.18で、「すばらしい」1.00、「良い」

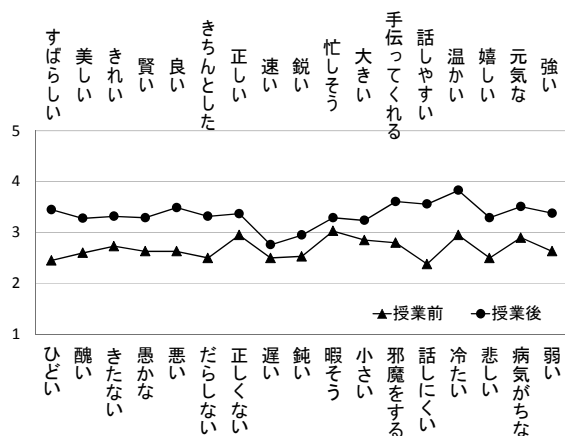


図1. 学生の「認知症の高齢者」に関するイメージの授業前後の変化

0.86, 「きちんとした」0.82, 「手伝ってくれる」0.81と続いた。授業前後の点数の差が小さかった項目は、「速い」「忙しそう」0.26, 「大きい」0.39, 「鋭い」0.42などであった。

対応サンプルの差の平均値を検定したところ、全ての項目で有意差が見られた ($t = -7.759 \sim -1.571$, $d f = 18 \sim 39$, $p < .01, .05$)。看護学生が認知症の高齢者に対して抱くイメージは、授業後のほうが授業前よりも肯定的に変化していた。

2) 主観的なイメージ変化

認知症の高齢者へのイメージは、「肯定的に変化した」40名(97.6%), 「変化なし」1名であった。認知症の高齢者へのケアのイメージは、「肯定的に変化した」36名(87.8%), 「変化なし」5名であった。いずれも「否定的に変化した」と回答した者はなかった。認知症の高齢者とそのケアへの関心度について、「関心が高まった」34名(82.9%), 「変化なし」7名、「関心がそがれた」と回答した者はなかった。

IV 考察

1. 授業前の看護学生の認知症の高齢者に対するイメージ

「認知症の高齢者」を刺激語とした自由記述では、記憶障害や妄想などの認知症の症状に関する内容、対応の困難さや介護負担が大きいことなどが大半を占めた。また、認知症の高齢者に対する恐怖心や「身近な人には認知症になってもらいたくない」などのネガティブなイメージもあった。「優しそう」というカテゴリーは唯一、ポジティブなイメージの記述であったが、記載は1件にとどまった。

道繁ら⁵⁾の調査においても、認知症高齢者の看護援助に対する講義前の看護学生の「認知症」のイメージでは、中核症状や周辺症状など【疾患(患者本人)に対する】カテゴリーに関連する記載が大半を占めており、その内容は本調査に比べ専門的で多岐にわたっていた。道繁らの調査した教育機関では、当該授業までに認知症の理解を中心とした教授を終えているのに対し、A大学では認知症に関連する授業は老年看護学概論のみであり、教育カリキュラムの進捗の違いによるものと考えられる。

「認知症の高齢者のケア」を刺激語とした自由記述では、高齢者の理解を得ることの難しさ、疲労感の強さやゴールの見えなさなど、認知症の高齢者のケアの困難さをイメージする記述が半数以上を占めた。認知症の高齢者に対するイメージの内容との関連で、ネガティブな記載が多いことは想定できる。一方、【繰り返しの言動などに丁寧に対応する】【認知症を理解し、受容的な看護を提供する】など、授業前から求められるケアをイメージしている学生もいることがわかった。また、ごく少数ではあるが、【恐怖心がある】学生、【看護をイメージできない】学生の存在も考慮に入れる必要がある。

対象者の属性では、親族に認知症の高齢者がいる者は2

割に満たないものの、半数近い学生が何らかのかたちで認知症の高齢者との関わった経験をもっていた。以上のことから、学習者のさまざまなレディネスについて把握して、教授する内容、方法を検討することが重要である。

2. 「認知症の高齢者のケア」の授業前後のイメージ変化
授業前後で、看護学生の「認知症の高齢者」のイメージは、全ての項目において肯定的に変化しており、統計的に有意であった。また、看護学生の主観的な評価においても肯定的な変化を感じた学生が多く、認知症の高齢者とその看護への関心が高まった学生も多かった。

田中ら¹⁰⁾は、高齢者の理解を促進するためには、看護学生が気づき、興味や関心を膨らませ、さらなる主体的な知識や理解に対する追求が動機づけられる教育が必要である。そのため、臨地実習に限らず、学内における講義・演習の充実が不可欠で、単に学術的で形骸的な知識のみの教授でなく、視聴覚教材などを用いた教育方法の工夫が必要だと述べている。今回の調査で、授業前後で、認知症の高齢者のイメージが肯定的に変化しており、認知症の高齢者とそのケアに対する関心が高まったことは、教育効果が認められたと考える。今回の授業内容との関連では、認知症の高齢者が書いた詩、認知症の母を介護した息子が書いた詩や漫画などの引用により、看護学生の認知症の高齢者やそのケアについてイメージを膨らませる効果もたらされたと推察する。

また、看護基礎教育課程における老年看護学教育プログラムのあり方として、看護学生が講義・演習から臨地実習へと継続的な学習への取り組みや認知症高齢者に対する関心を向けて接近を図ることを支持する包括的教育プログラムの骨子でなくてはならないとの指摘がある⁹⁾。今回の授業内容との関連では、先輩学生が認知症対応型グループホームでの臨地実習で得た学びを紹介することにより、先輩の学習経過に学生自らの学習の継続性を重ねることで、講義・演習から臨地実習へと継続的な学習につながれば、包括的教育プログラムとしての教育実践のひとつになると考える。

V 本研究の限界と課題

本研究結果は、限られた対象によるものであるため一般化の域にない。より教育効果の高い教授方法の工夫を行うためには、認知症の高齢者へのイメージを肯定的に変化させた要因の検証が必要である。また、包括的教育プログラムとしての評価を目的として、臨地実習後まで縦断的にイメージの変化の調査を継続することも今後の課題である。

謝辞

本研究にご協力いただきました学生の皆さまに心から感謝申し上げます。

なお、本研究は、第15回日本認知症ケア学会大会において発表した内容に加筆修正したものである。

文献

- 1) 棚崎由紀子, 光貞美香, 田村一恵: グループホーム実習に関連した看護学生の思いと認知症高齢者イメージの変化. 宇部フロンティア大学看護学ジャーナル, 5 (1), 37-42, 2012.
- 2) 古市清美, 高橋ゆかり, 鹿村真理子, 他1名: 認知症高齢者に対する看護学生のイメージ変化とその要因. 介護老人保健施設実習を通して. 日本看護学会論文集 精神看護, 42, 214-244, 2012.
- 3) 進藤ゆかり, 原井美佳, 村松真澄, 他1名: 老年看護学実習における看護学生の高齢者イメージの変化. 地域健康高齢者を対象とした実習Ⅰ及び認知症・虚弱高齢者を対象とした実習Ⅱ前後の比較. 日本看護学会論文集 老年看護, 42, 151-154, 2012.
- 4) 吉本知恵, 横川絹恵: 看護学生の認知症高齢者に対するイメージ変化およびその影響体験. 老年看護学実習に焦点をあてて. 日本看護福祉学会誌, 12(2), 67-77, 2007.
- 5) 道繁祐紀恵, 奥山真由美, 杉野美和: 老年看護学教育における認知症高齢者への看護援助に対する教授方法の一考察. 山陽論叢, 20, 15-24, 2013.
- 6) 松本明美: 認知症高齢者に対するイメージの縦断的調査と認知症高齢者看護観の形成. 足利短期大学研究紀要, 30 (1), 73-80, 2010.
- 7) 荒川博美, 仙田志津代: 看護学生の認知症高齢者への意識と地域での支援意欲との関連. 看護教育研究学会誌, 2, 3-14, 2013.
- 8) 中野いく子: 児童の老人イメージ-SD法による測定と要因分析-. 社会老年学, 34, 11-22, 1990.
- 9) 田中敦子, 鳴海喜代子: 認知症高齢者への看護学生の受容的感情とその影響要因に関する縦断的調査. 埼玉県立大学紀要, 7, 59-66, 2005.